

## <研究会報告>

### 第42回 例会 報告

1998年10月31日(土)に、本会の第42回例会が筑波大学学校教育部において行われた。例会で行われた木村勝彦氏の講演と、山田美保氏の報告の要旨は以下の通りである。

#### 「社会科前史の一断面に関する研究報告」

木 村 勝 彦

戦前の小学校段階における公民教育についての研究は科目がなかったこともあって未だ不十分である。しかし、そこでの議論は中等段階と同様、社会科成立に対して何らかの契機を与えたであろうことは予想できる。特に本発表では高等小学校での公民教育の議論と実態を検討した。大正から昭和にかけての小学校の公民教育に主として影響を与えたのは臨時教育会議(大正6年－8年)、文政審議会(大正13年－昭和10年)及び衆議院議員選挙革正審議会(昭和5年－7年)での公民教育に関する議論である。前二者の会議では、高等小学校で科目設置を土地の状況に合わせることに、さらには文政審議会後、公民的陶冶を重視することが主張され、それに対して各地で議論が行われた。例えば、千葉県では夷隅郡で小学校の公民教育実施のためのプランが提出されたり、また千葉師範附属小学校では公民教育を強調した県の答申を契機に学級自治会組織が行われるようになるなどかなり積極的な動きが見られた。

一方、昭和に入ってから、革正審議会でも高等小学校における公民科の特設が示され、それを議論の対象として昭和7年には奈良女高師附属小学校で学習研究会が行われた。そこでは結果的には全教科における公民教育の推進という結論が出された。その理由として小学校の公民教育では知的なもののみでなく、態度的側面及び心情的側面を重視し、その結果、原理としての公民教育を主張することになったものである。そして、そうした考え方の中には革正審議会で見られた政治教育としての「立憲思想の教育」という方向は見られず、国家的目的を前面に押し出した結果、公民教育が方法的問題に限定され、政治教育はおろか公民科でさえ許容できない形へと繋がっていたと考えられる。以後、満州事変を経て戦時体制へと入っていく中で、小学校の公民科特設に関する議論は事実上、消滅することになる。

このように小学校、とりわけ高等小学校段階における公民教育は法的に科目の設置が行われなかったが、一方で各地で様々な議論が行われることとなった。そうした議論を各地に残された資料で確認していくことが以後の作業として必要であると考えられる。

## 社会科におけるチーム・ティーチングの実践例

一都立大泉学園高校における「国際理解」の6年一

山 田 美 保

大泉学園高校は「教育困難校」化対策として普通科コース制（デザイン美術・福祉・国際教養）を導入した。コース毎に特色ある科目を開設し、選択させ、得意な分野を重点的に学ばせるためである。国際教養コースには社会科教員がチーム・ティーチングで担当する科目「国際理解」2単位を開設し、今年で6年目をむかえている。異動により昨年はじめて「国際理解」を行うこととなった。具体的には前年から担当している教員（政経）の方針に従って、二人一組で24名の生徒を受け持ち、二人が隔週で教材を用意し、授業も主導する、教材を用意しなかった方は、生徒の視点にたって授業者の補助者になり、生徒の支援も行う…というものである。

まず1学期はNHK製作の「人間は何を食べてきたか」など世界の食文化を熱かったVTRを視聴させ、内容を問うプリントに記入させた。できるだけ身近な食品を扱うことにし、また興味を持たせるため実物を提示してから（「とうもろこし」の場合は入手しやすい「カール」や「コーンスープ」などの加工品）、視聴に移る、あるいは視聴後に実物を味わさせる（「じゃがいも」なら瓶詰の「アンデスポテト」）等の工夫をした。さらに、日本と異なる食べ方・作り方に注目させるだけでなく、世界の様々な地域の、何世代にもわたる努力と工夫によって、現代日本の食生活に豊かさがある点に気づくような発問を設定した。また一見単調にみえる食生活であっても、伝統的な「食」は栄養面でも環境面でも優れていることに気づかせるようにした。

2学期には「環境問題」をテーマに、教員も参加するグループを作り、学校内のゴミ集めをさせたり、NHK「30日間の挑戦」などのVTRを視聴させ、「環境に配慮」した生活の実例を学ばせた。その際には「ドイツのリサイクルは徹底していてすごい。日本は遅れているから駄目だ」といったあきらめムードばかりにならないよう、生徒自身の日々の努力の重要性に気付かせる配慮をした。（ドイツといえば第二次世界大戦中、強制収容所内で「不要な人間」の処理・リサイクルを徹底していた。一概に優れているとは言えない。）

3学期には「留学生が先生！」プログラムを申し込み、マレーシア人留学生に来校・お国紹介していただき、「異文化理解」を体験させた。また、VTR「風になった男 川口慧海ネパール百年の旅」を視聴させ、「異文化理解」の実践者から成功の秘訣を学ばせた。特別活動期間中の一日を使い、中国帰国者定住促進センターを訪問し、コミュニケーションを成立させる体験学習も実施した。

1年間の実践を終えて、チーム・ティーチングの効果については以下のようなものを得た。  
①2人の教員によって授業が展開されることそのものが、「異文化理解」のモデル（相違の認識と協力の重要性）として生徒に役立つ。②生徒にきめ細かな対応ができる。③生徒を複眼的に評価できる。④教員相互に刺激を与え、指導法を工夫できる。⑤まる1週間以上という十分な教材研究時間がある。今後、さらに実践を深めたいと思っている。

\*東京都立大泉学園高校